

平成26年度

地域で決める学校予算事業第5回評価会議 会議録

平成27年3月20日 会議

地域教育課

平成26年度 地域で決める学校予算事業第5回評価会議 会議録

開催日時	平成27年3月20日(金) 10時00分～11時30分
開催場所	奈良市役所 北棟6階 第22会議室
内 容	<p>○ 開 会</p> <p>1 平成26年度の事業について</p> <p>2 平成27年度の事業について</p> <p>3 その他</p> <p>○ 閉会</p>
出席者(委員)	<p>加藤久雄委員 瀬渡章子委員</p> <p>岡田龍樹委員 石川陽委員</p> <p>中川直子委員</p>
(事務局)	<p>城学校教育課長(代理 皿木指導主事)</p> <p>松田地域教育課長(庶務)</p> <p>地域教育課員6名</p>
開催形態	<p>公 開</p> <p>傍聴人 なし</p>
担 当 課	地域教育課

議 事 お よ び 協 議 内 容

○ 開会

- ・加藤委員長より本委員会の公開について確認
会議の公開、写真撮影・録音の了解
会議録の署名委員は、岡田委員と石川委員
傍聴者なし

◎議事

1 平成26年度の事業について

【事務局説明】 ●平成26年度地域で決める学校予算事業における活動内容

「22地域教育協議会の活動」を報告（資料1とスライド）

●奈良市地域教育推進事業第4回「交流の集い」総括について

資料2とスライドで説明

課題：参加者の分類で「一般」と「地域教育協議会」の区別を明確化する。

加藤委員長：では「平成26年度地域で決める学校予算事業における活動内容」の説明についてご意見ご質問をお願いします。私は「第4回交流の集い」を最後まで見させていただいた。お楽しみ抽選会、全員合唱などとても良かった。多くの人が残っていた。

瀬渡副委員長：途中で失礼したが、22地域教育協議会の取組を全て視聴できるのは良い。

中川委員：ポスターセッションはよいのだが、同時発表なので、全てを聞けない。1分位のもので全校区を聞きたい。

加藤委員長：アンケートに「ポスターセッションは離れてやらないと聞き取りにくい」という声があった。会場の配置も影響する。

中川委員：発表者の声の通る人、大きさにもよる。

瀬渡副委員長：伝えることを目的にするなら、大きな声が必要だ。

石川委員：当日参加できなかった。良かった事は次年度に継続する。例えば会場として100年会館が良いのであれば同じ場所で開催し、自分たちの活動を再度振り返る。自分たちで企画した実行委員は、あれだけの会場で開催し達成感がある。また市民にとっても100年会館は期待値がちがう。このような動員力を考慮し、次年度も100年会館を予約してほしい。

一方、一つ一つの事業の目的を検証し、企画者と主催者の両方で意見交換する必要がある。例えば学校でのポスターセッションとは「発表者：子ども」の発表意識を高めるのが目的。わざと騒々しい、狭い場所で少人数のセッションを行い、聴く側ではなく発表者側のために行うもの。「狭い場所で視聴者が1歩前進して聴く」これが予めルールだ。このルールを両者が理解しないと成り立たない。

ポスターセッションでの発表者側の満足度と30秒アピールでの発表者、視聴者両方の満足度は組み合わせて価値が出てくる。「1分間プレゼンテーションスキル講座」

や「TED 映像」などを見せて、「いかに短時間にポイントを伝達できるか、人を引き付ける発表ができるか」を研修に組み入れる。又は「直前に練習する」を組み合わせると良い。すると発表者、視聴者両方に満足感が得られる。

鑑賞の良し悪しではなく、それぞれの成果やねらいを実行委員と共有すると次年度、更に意識が高まる。小中一貫教育フォーラムなどに地域人材によるポスターセッションを企画し、来場者とやり取りするという案もある。

加藤委員長：次年度「小中一貫全国サミット」が奈良市で実施される。小中一貫は中学校区と地域の関係に類似している。

岡田委員：交流の集いの運営は良かった。ポスターの出来栄えもかなり作りこんでおりすばらしい。昨年も事後、公民館に掲示したが、記録として写真や資料集として残すとよいと感じた。

加藤委員長：次は「平成26年度の事業」について意見を伺いたい。

石川委員：短期間でここまでのレベルに到達したのはすばらしい。他の国内中核都市を比べても例をみない。全市展開で実施した苦労はあるが、市教委も成果を感じていると思う。

毎年評価が厳しくなる中学校区は、プレゼンテーションで何を伝えたいのか、会場で感じたことを地域にどう伝えるのかを考えてしまう。レベルアップしたいならどうすればよいかを考えてほしい。プレゼンテーションだけでは評価しにくい。

加藤委員長：「地域で決める学校予算事業」も5年目を迎え、先頭を切る地域と我々の思いを伝えて方向付けなければいけない地域がある。いずれにせよ、それぞれのポジションから、上を目指して欲しい。事務局も評価に苦労している。

岡田委員：「地域教育を考える委員会」でも話に出たが、「一般」の意味をどうするのか。どの層を指すのか。この事業に関らない保護者は「一般」なのか。事業に関らないが奈良市に住む人が「一般」なのか。広報をどこに向かってすればよいのか。

石川委員：少なくとも奈良市住民が通りすがりで「交流の集い」に参加したとしても、奈良市か市外かでカウントするとよい。

岡田委員：一方、この事業に関っている地域人材は非常に熱心で周知されているが、そうでない方には全く伝わっていない。活動者にはそのモヤモヤ感があると思う。

石川委員：このような活動はどうしても「蛸壺化」しやすい。自分たちの課題を探し、不満足な部分を検討していくと、結果として熱心な人だけの活動ということになる。

加藤委員長：交流の集いにおける初参加者のアンケートに「敷居が高い」とあった。高くないのだがそう見えてしまう。

石川委員：「敷居が高い」と言われれば低くするしかないが、これは「組織力」をいかに活発化するかに関ることだ。次世代若手コーディネーターやボランティアを確保できた地域とそうでない地域があり、確保できていない地域では一般保護者の参加を望むだろう。このようなことに、次年度力を入れるとよいのではないか。

中川委員：一般保護者は「交流の集い」を周知しているのか。

岡田委員：もちろん知っている。

石川委員：学校便りでも知らせているはずだ。

中川委員：学校便り、自治会、しみんだよりなど様々な方法で広報しても、見ない人は見ない。様々な形での広報が必要だ。

石川委員：この「交流の集い」という大きな取組を見せること自体が広報である。その日の内に体験できるディズニーランドのようなものだ。これは成功例。保護者同士が「良かった」と伝えて拡がる。広報手段として高い評価を得られると思う。

事務局：初参加が4割。この200人を経年積み上げると、大きな広報となる。自治会掲示板、ポスター、FMラジオ、しみんだよりなど工夫した。

瀬渡副委員長：このような取組の存在を知らせることに意味がある。「毎年お知らせがある」を積み重ねると注目度が高くなる。そして取組を知らされても、自分とどう関係があるのか分からなければ、参加しようと思わない。自身の取り組む事業との関係で参加・不参加を決める。初参加が4割とはすばらしい。

岡田委員：広報で効果的なのは第三者から広報されることだ。広報戦力の一つとしてマスコミ利用をする。今回の読売新聞社参加は良かった。号外を作成配布するだけでなく、翌日の奈良市版にも掲載してくれた。主催者側が広報するよりも、第三者から広報されると拡がる。

瀬渡副委員長：テレビなどの取材はあったのか。

岡田委員：ない。

瀬渡副委員長：テレビ放送や第三者機関で取り上げるとよい。

2 平成27年度の事業について

加藤委員長：では議題の2番目27年度の事業について、事務局から説明を。

【事務局説明】●「平成27年度学校区別評価一覧」について（資料3）

- ・プレゼンテーションでは今年度と次年度の区別を明確にして発表する。
- ・PDCAサイクルの強化
- ・主たる発表者を学校から地域に移行する。
- ・プレゼンテーション終了直後の協議会メンバーの感想を披露。

●「事業チェックシート」について

加藤委員長：今の説明と資料について、ご意見ご質問を。

石川委員：平成26年度はかなり評価基準を変えた1年目だ。レーダーチャートの形も変わると昨年話し合った。経年比較はそのことを差し引かないと難しい。事業計画書の評価とプレゼンテーション評価点の違いには着目すべきだ。地域と学校の連携は実際に会って話さないとわからない。あるいは、特定人物が牽引している校区で、それが本当に地域や学校が希望していることなのか分かりにくい時、我々の評価が低くなる。

質問を評価委員がしない協議会については、私の記録では毎年同じ校区だ。そのような意味では、課題は見えている。平均点から評価を説明するのではなく、22しかない団体数なので、各々の協議会の方の顔を見て話し合う方がよいと思う。

活動も計画も良さそうだが、実際の計画書は良くかけていない所がある。会って話すとすばらしい話が聴ける。計画書を書く人物が簡単なコピー・ペーストを繰り返して

いるところは、計画書の評価が低い。やはり中学校区ごとの人物と様子は見えてきた気がする。

加藤委員長：やさしい表現でフィードバックしてもよい。メモ書きで評価委員の指摘や意見を伝えると良い。またプレゼンテーション会場もよかった。プレゼンテーションを終えた直後の協議会メンバーに感想を聞いたそうだが、意見交換が物足りなかった所もあるのか。

石川委員：評価委員が質問しなかった協議会は物足りなかったと思う。それ以外は話が弾んだ。評価委員から質問しなかった校区がパターン化しているのであれば、その学校区ごとにアドバイスをしなければいけない。高得点の地域も100%満足しているわけではなく、今後どうしていくか、我々がアドバイスしなければならない。

加藤委員長：評価委員から箇条書きコメントをメモでもらい、それを地域教育課がA4サイズ1枚にまとめる。正式な書面ではなく、評価委員の会議で出た意見メモとして渡すのはどうか。

事務局：同時に、平成27年度が始まってすぐに、プレゼンテーションの評価結果と共に4～5行のコメントをつけて地域に返す予定をしている。プレゼンテーション時の意見交換記録を参照しながら作成している。

加藤委員長：各校区ごとの指摘ではなく、全体を捉えた意見としてまとめてほしい。例えば「学校教員の発表のみの地域もある」というような。話し合った内容を総括し、事務局がまとめたメモとして渡してほしい。負担にならず、我々も細部を助言できる。

中川委員：プレゼンテーションの発表者は会長・教員・総合コーディネーターと様々だが、発表者を選ぶ基準や参加人数（1～2名もあれば多数もある）で印象も違うと感じた。

加藤委員長：評価委員はその様子も見ていて、地域の交流も評価していると伝えたい。「一人の卓越した発表者が全て話すのでは意味がない」というようなメモ書きを渡す。アセスメントでは重いので。

中川委員：つぶやきのようなメモでよいのか。

石川委員：つぶやきで「発表者は一人でない方がよいのではないか…」と。

石川委員：学校教員が前面に出る場合は「早く地域にシフトしてほしい」と言えるが、地域の偉い方が出てくる場合、それが、その地域の象徴であり、選択である場合は難しい。

岡田委員：地域には「私が…」という方はいらっしゃる。その方の意向を肯定しながら、うまく運営しているところは、ある意味参考になる。

中川委員：学校教員が発表する協議会は、比較的東部地域が多い気がする。イメージ的に学校教員が中心に活動していると思う。

石川委員：その通りだ。学校教員が地域に遠慮していることが悪い形で出ている。コーディネーターの人材不足、多種役職の掛け持ち、高齢化、多忙から、プレゼンテーションの原稿くらいは教員が作成しようということになる。まだ奈良市の中では難しくても、日本全国では同じケースで、その課題を克服し、地域が頑張っているケースもある。予算を使い、視察に行くアドバイスも必要だ。

中川委員：元々昔から地域全体で学校を支援しており、敢えて「地域で決める学校予算事業」

の予算を使うというイメージではなく、100回続く柳生の運動会、興東の祭など、常に地域人材が関わっている。地域と学校の繋がりを感じる。

石川委員：それはこの事業予算の使い方を理解しているかどうかだ。「学校の課題を地域の力で解決していこう」というのが本事業の目的だ。祭りが100年続いているのに少子化が進む。これはまさに地域の課題であり、地域の課題解決のみでは利害がぶつかるが、「学校を中心に子どものために」という目的を述べると衝突しない。そして「地域と学校両方で使える予算を使って学校を支援し、結果として地域も活性化すればよいのではないか…」という仮説に基づいた活動をしている。その仮説に基づき好結果がでる地域とそうでない地域がある。組織作りに4年間を費やし、地域の組織力もある程度把握でき、協議会組織の若返りができる所とできない所もある。学校がどんな課題を抱えているかを両方で話し合うとよい。元々地域の結束力が強いのに、学校や町が無くなるという現象を止めるにはどうすればよいのか。学校を残したいのであれば地域の強い結束力を学校のために使えないだろうかという思いを地域はもとより、学校が申し出るべきだ。地域の力があるのに活動がマンネリ化している所は、「学校が地域の力を使い切れていない」といえる。

加藤委員長：地域は多様なタイプに分かれるが、その中で個人的には、羊を飼い始めた所が興味深い。自治会も無く、他からみるとやりにくそうだったが、羊が地域をまとめた。今後は分からないが、ここまで進めた苦労は理解できる。

様々な町のタイプがあり、難しい。評価委員の様々な視点を知らせると良い。評価委員の意見を1つにまとめることはない。様々な評価委員の意見の中で、「この意見を参考にすればもう1歩前進できますよ」と知らせる。月ヶ瀬の活動なら、私でも「アルミ缶と紅花染め（烏梅）」とわかる。一歩前進した活動を勧めたい。茶ムリエはおもしろい。

石川委員：行事に予算を使う発想から早く逸脱してほしい。お祭りをしなくても学校（先生）と地域と保護者が集まって井戸端会議を年に数回する方が良いと思うことがある。行事をすればするほど人手と時間がかかり、準備の負担感があるのに、減らす方向にはならない。

岡田委員：お金を使うのも中々大変だ。行事に使うのが最も手っ取り早い。会議をし、立案予算計上するのはいかに工夫がいることかと思う。

中川委員：行事は「やりました感」が違うと思う。

加藤委員長：様々な意見が出たが、このような議論が大切だと思う。平成27年度に向け事務局からも方向性が出るかもしれないが、第2の議題はこれで終了する。

3 その他

加藤委員長：それでは議事3その他に移る。3年間評価委員を継続していただき、何か気になることはないか。

石川委員：気になるのは柳生と興東の統合だ。プレゼンテーションの時点で地域教育協議会をどうするかという話し合いをしていないという。興東館柳生中学校区は注意して見て

いかないといけない。学校がその任務を担わなくてはならないので、その負担も大きいと思う。行事を分けるのか、両方にいた総合・地域コーディネーターやボランティアがどう動くのか等は、情報を収集し適切な学校の支援をしつつ、地域の方々への支援を続けていただきたい。2つ目は学校教育に関すること。ある程度組織が成熟している所は、学校の今抱えている課題に地域が協力できることを、常に教育委員会から伝えてほしい。学校現場の教員から「我々の活動を見てくれている」という声を次年度は聞きたくない。地域の方が頑張る中で「自分たちの苦労は知ってくれている」と教員に感じてもらいたい。研修でできることではない。学校も地域連携担当教員を役割分担してくると思うが、「学校教育に関わる」というステージを用意し、「教員が理解し始めている」という感想を聞けるようになりたい。

「交流の集い」の元々は、数年前東京視察で「コーディネーターの集い」を見たコーディネーターから端を発した。他都市の好事例情報を教育委員会も収集し、市教委も視察に出向き、できれば地域コーディネーターも同行してほしい。日本中には様々な困難の途上や克服した地域があるので、それを見せてあげたい。是非コーディネーターに外を見せるための予算執行をしていただきたい。

加藤委員長：他に無いようなら、これにて議事を終了する。

【松田課長閉会挨拶】

「交流の集い」視察への礼と次年度への協力依頼

閉会